

二〇二四年二月三日[土]

十四時開演(十三時三〇分開場)

京都芸術劇場 春秋座

(京都芸術大学内)

主催：京都芸術大学 舞台芸術研究センター  
後援：京都市教育委員会  
令和5年度京都市文化芸術体験機会創出事業

渡邊守章記念

# 春秋座 能と狂言

プレトーク

狂言

かくしだぬき  
隠狸

能

そとわこまち  
卒都婆小町

いちどのしだい  
一度之次第



<https://forms.gle/xV8t8wtfJTEU4YDD8>

アンケート回答へのご協力をお願い  
※回答期限 2月13日(火) 17時まで

本日は、「春秋座—能と狂言」にお越しいただき、まことにありがとうございます。  
本公演では、Webでのアンケートをおこなっております。  
ご回答いただいた内容は、今後の企画の参考とさせていただきます。  
左のQRコードを読み取り、アンケートへのご回答をお願いいたします。

次回「春秋座—能と狂言」  
2025年2月8日(土) 開催予定!

## 狂言『隠狸』

### ■ 語句解説

誠 <small>まこと</small>	—— 真実。本当。
確 <small>しつこ</small> と	—— 確かに。
各々 <small>おのづから</small>	—— 各自。めいめい。
認 <small>たが</small> めて	—— 用意して。
成 <small>なりあ</small> り合 <small>あ</small> い	—— 成行き次第。
小竹筒 <small>こたけ</small>	—— 竹製の携帯用酒器。
遠来 <small>えんらい</small>	—— 遠隔の名産地より到来の酒。
打擲 <small>うちなげ</small>	—— 打ちたたくこと。なぐること。
指神 <small>さしがみ</small>	—— 陰陽道の天一道（なかがみ）。塞がりの神。この神のいる方向を「ふたがり」といつて忌み、その方に歩く時は「方違え（かたがたがえ）」をした。
南無三三寶 <small>なむさんぼう</small>	—— 打ちたたくこと。なぐること。

### ■ 謡の詞章

「兔」	あの山からこの山へ 跳んできたるは何じやろ 頭に二つ ふつぶつと 細うて長うて ぴんと跳ねたを ちゃつと推した 兎じゃ
「花の袖」	あはれ一枝を 花の袖に手折りて 月をも共に 眺めばやの 望みは残れり この春の 望み残れり
「鶴飼」	志まつ巢おろし荒鶴ども この川波にばつと放せば 面白の有様や 底にも見ゆる篝火に 驚く魚を追ひまはし かづき上げすくひ上げ 隙なく魚を喰う時は 罪も報も後の世も 忘れはてて面白や 漲る水の淀ならば 生簀の鯉やのぼらん 玉嶋川にあらねども 小鮎さばしるせざらぎに かだみて魚はよもためじ 不思議やな篝火の 燃えても影の暗くなるは 思ひ出でたり月になりぬる悲しさよ 鶴舟の篝火消えて 闇路に帰るこの身の 名残惜しさをいかにせん

提供・万作の会

片山 九郎右衛門（観世流シテ方）  
きたまり（振付家）  
進行・川原 美保（京都芸術大学、本公演制作担当）

狂言 隠狸 シテ 太郎冠者 野村万作 アド 主 野村萬斎  
後見 野村裕基  
〈休憩約15分〉

シテ 小野小町 観世鏡之丞  
能 卒都婆小町 ワキ 高野山僧 宝生常三 大鼓 亀井広忠 笛 竹市学  
一度之次第 ワキツレ 從僧 舘田善博 小鼓 大倉源次郎

後見	片山伸吾	地謡	安藤 貴康	分林 道治
	青木道喜		梅田 嘉宏	古橋 正邦
			橋本 忠樹	片山 九郎右衛門
			観世 淳夫	味方 玄

## 『卒都婆小町 一度之次第』を観るために 天野文雄（大阪大学名誉教授）

本日は能という演劇の象徴性を楽しんでいただきます。それとともに、ここでは『卒都婆小町』を観るために参考となる現在にいたるまでのことを述べてみます。

### ■ 小町はどこへ行くこうとしているのか。

現在の『卒都婆小町』は観阿弥作といえながら、少なくとも二ヶ所に世阿弥の手が加わっています。一つは、「漕ぎ行く人は誰やらん」に続いて長い道行が続いていること、もう一つは、たぶん少将の憑依が覚めたあと、「このあたりに玉津島のおはします」と小町が言って幣帛を捧げたのに続いて、狂言の日吉大夫扮する鳥が登場していたのですが、その場面をいずれも世阿弥がカットしたことです（「申楽談儀」）。これを考えるひとつの手がかりは、小町はいったどこに行こうとしていたのかですが、後代の『鸚鵡小町』や狂言『歌仙』などを参照すると、和歌の神を祀る玉津島明神のように思われます。小町は歌人です。そういう物語が本曲以前にあった、『卒都婆小町』はそれに拠っていたのではないのでしょうか。

### ■ 卒都婆問答と『山姥』の「煩惱即菩提」はどう異なっているか。

小町と高野僧との卒都婆をめぐる論争は、小町の完全な勝利で終わります。この「論理」は世阿弥作の『山姥』でも一曲の主題になっていますが、両者はどう異なるのでしょうか。『山姥』は「煩惱即菩提」を説いた山姥自身が「山巡り」とともに妄執の雲にうずもれて消えてゆきます。妄執のまままで菩提だというので、その点、『山姥』は「論理」として徹底していると言いか、観念的です。それに対して『卒都婆小町』の小町は少将の憑依という最悪の状態のあと、菩提の道に入ろうと決意しているので、現実的です。「観念」と「現実」、ここには観阿弥と世阿弥の違いがよく現われているのではないのでしょうか。

### ■ 〈物着〉の演出から思うこと。

〈物着〉は古い演出で、どの流儀にもあります。それゆえ、『卒都婆小町』は〈物着〉は本来の演出であり、不可欠なものと考えられてきましたが、憑依から醒めたあとそのままの姿でキリの謡があり、そのままの姿で幕に消えてゆくというのが、わたしにはどうもひっかかります。そう言っているのは、研究者ではわたしだけなのですが、このような疑問ははたして観阿弥の時代に〈物着〉があったのかどうか、その場合は、今日のような〈物着〉が生まれるまで、どのような経緯があったのかということへも波及しますが、どうでしょうか。

### ■ 「一度之次第」になると通常の形とどう違うのか。

「一度之次第」という小書は、観世元章が明和二年（一七六五）に刊行した明和本で考案された演出です。だから観世流にしかありません。この演出の趣旨は、第一段と第二段を入れ替えることで卒都婆問答をより前面に出そうとしたものですが、時間短縮も考慮したようです。その結果、『卒都婆小町』は観阿弥の原作からまたしても遠くなくなってしまったのですが、この改変はとかく評判がよくない元章の改革のなかでは成功したもののようで、最近では「一度之次第」で演じられることが多いようです。昭和五十二年に新宿の矢来能楽堂で演じられ、その年の岸田國士戯曲賞を受けた太田省吾の『小町風伝』も、この「一度之次第」を観たことがきっかけとなっているように思いますが、どうでしょうか。

# 『卒都婆小町 一度之次第』

## ― 上演詞章 ―

### 詞章

#### 1 【習ノ次第】

〔次第〕  
シテ「身は浮草を誘ふ水、身は浮草を誘う水、なきこそ悲しかりけれ  
〔サシ〕

シテ「哀れやげに古へは、橋慢最も甚だしう、翡翠の髪伏は、婀娜と嬋やかにして、楊柳の春の風に靡くがごとし、また鶯舌の嘯りは、露を含める糸秋の、託言ばかりに散りそむる、花よりもなほめづらしや、今は民間賤の女にさえ穢まれ、諸人に恥をさらし、嬉しからぬ月日身に積もつて、百歳の姥となりて候  
〔下ゲ歌〕

シテ「都は人目つつましや、もしもそれとか夕まぐれ  
〔上ゲ歌〕

シテ「月もろともに出でて行く、月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大内山の山守も、かかる憂き身はよも咎めじ、木隠れて由なや、鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん、漕ぎ行く人は誰やらん  
〔着キゼリフ〕

シテ「あまりに苦しう候ふほどに、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候  
シテ「月もろともに出でて行く、月もろともに出でて行く、雲居百敷や、大内山の山守も、かかる憂き身はよも咎めじ、木隠れて由なや、鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎ行く人は誰やらん、漕ぎ行く人は誰やらん  
〔着キゼリフ〕

シテ「一見卒都婆永離三悪道  
シテ「一念発起菩提心、それもいかでか劣るべき  
ワキツレ「菩提心あらばなど浮世をば厭はぬぞ  
シテ「姿が世をも厭はばこそ、心こそ厭へ  
ワキ「心なき身なればこそ、仏体をば知らざるらめ  
シテ「仏体と知ればこそ卒都婆には近づきたれ  
ワキツレ「さらばなど礼をばなきて敷きたるぞ  
シテ「とても臥したるこの卒都婆、我も休むは苦しいか  
ワキ「それは順縁に外れたり  
シテ「逆縁なりと浮かむべし  
ワキツレ「提婆が悪も  
シテ「観音の慈悲  
ワキ「衆特が愚痴も  
シテ「文殊の「知恵  
ワキツレ「悪と云ふも  
シテ「善なり  
ワキ「煩惱と云ふも  
ワキツレ「菩提もと  
シテ「植木にあらず  
ワキ「明鏡また  
シテ「台になし  
〔歌〕  
地「げに本来「物なき時は、仏も衆生も隔てなし  
〔上ゲ歌〕  
地「もとより愚痴の凡夫を、救はんための方便の、深き誓ひの願なれば、逆縁なりと浮かむべしと、懇ろに申せば、まことに悟れる非人なりとて、僧は頭を地につけて、三度礼し給へば  
シテ「我はこの時力を得、なほ戯れの歌を詠む  
〔下ノ詠〕  
シテ「極楽の内ならばこそ悪しからめ、外は何かは、苦しかるべき  
〔歌〕  
地「むつかしの僧の教化や、むつかしの僧の教化や

### 現代語訳

#### 1 老女の登場

老女は美貌にめぐまれた昔の日々に思いをさせ、また落魄して百歳の老婆になってしまったと述懐しつつ、人目が多い都を出て行くこととする。

老女 わたくしは浮草のように落ちぶれた境遇にありますが浮草なら水が誘ってくれるのに、悲しいことに、いまはわたくしを誘ってくれる人もいません。ああ、まったく、昔のわたくしは、その美しさゆえに、たいへんな驕りの持ち主でした。髪は美しい翡翠の簪で飾り、それはさながら柳が春の風になびくようにたおやかでした。また、声は鶯の鳴き声のようであり、露に濡れた糸秋の花がほんの少し散りはじめたより風情があつたものです。しかし、いまは世の賤しい女にまでうとまれ、多くの人に恥をさらして、物憂き年月を送っているうちに、百歳の老婆となつてしまいました。

僧 人目がはばかれるものです。「ひよつとしたら、あれは小町では」と、いつ言われるか心配で、それで夕暮れ月といつしよに、都を出ることにしたのです。都人も、このような落ちぶれた者など見咎めはしないでしようから、身を隠したりする必要もありません。しかし、道中の鳥羽の恋塚や秋の山が木に隠れて見えないのは残念なことです。また、月に照らされた桂川を川瀬舟で行く風流な人は誰なのか、気になります。あまりにくたびれたので、ここにある朽木に腰を掛けて休息しようと思います。

従僧 そもそも、卒都婆は、金剛薩埵が仮に現われて大日如来の誓願を形に表わされたものだ。  
老女 その表わされたという形は、どのようなものですか。  
僧 地、水、火、風、空の五大だ。

老女 地、水、火、風、空の五大や五輪といえば、それは人間の身体と同じです。ならばどうして、わたくしが卒都婆に腰を掛けているのがいけないのでしょうか。  
従僧 形は同じでも、心のあり方や功德の有無が人とは違うのだ。

老女 では、お尋ねします。その卒都婆の功德というは何ですか。  
僧 「一見卒都婆、永離三悪道」といつて、ひとたび卒都婆を拝したなら、永遠に三悪道から脱却できることである。

老女 しかし、「一念を発して菩提心を起こせば、百千塔を造立するのにもまさる」といわれていますが、そのようなわたくしの菩提心は卒都婆の功德に劣るとは思われませんか。  
従僧 菩提心があると言うなら、どうしてこの憂き世を厭つて仏道に入らないのか。

老女 姿で世を厭うわけではありません。心が問題で、心で厭うのです。  
僧 その心がない不屈き者だからこそ、仏体だと知らずに、卒都婆に腰掛けたのであろう。

老女 いや、仏体と知っていたからこそ、卒都婆に近づいたのです。  
従僧 それなら、どうして礼拝をしないで、腰掛けたりしたのか。

老女 もともと、この卒都婆は倒れて横になっていたもの。そこに休息したのは不都合でしょうが、僧 それは仏道に入るための善行とはとても言えない。  
老女 たとえ悪事を行つても、往生は可能です。  
従僧 提婆達多のような悪人でもか。

老女 はい、慈悲深い観音と同じように。  
僧 周利槃特のような愚人でもか。  
老女 はい、文殊のような賢者と変わることはありません。  
従僧 それでは、悪とは。

#### 2

〔名ノリ〕

ワキ「これは高野住山の沙門にて候、靈仏靈社参詣のため、只今都へ上り候  
〔着キゼリフ〕

ワキ「急ぎ候ほどにこれははや津の国阿部野の松原とかや申し候、この所に暫く休らうするにて候

#### 2 僧の登場

高野山で修行した僧が上洛しようとして、阿倍野の松原に着く。

僧 わたくしは高野山で修行を終えた僧ですが、靈仏靈社参詣のため、これから都に上ろうと思ひます。

急いだかいつて、はや摂津の国の阿倍野の松原とかいう所に着きました。しばらくここで休むことにしよう。

#### 3 老女、僧たちの応対

僧が卒都婆に腰掛けている老女を咎めて、卒都婆が仏体である理由、卒都婆の功德などについての問答となり、やがて老女による「煩惱即菩提」という思想（一如觀が示されて、論争は老女の勝利に終わり、それまで立っていた僧と従僧は地に伏して老女を拝する。

僧 これこれ、ここにいる乞食をご覧なさい。ああ浅ましくもやつれば候うよ。腰掛けているのは、まちがいなく卒都婆です。教化して退かそうと思ふ。  
従僧 その通りです。

僧 その乞食よ。そなたが腰掛けているのは、もつたない仏のお姿と言われましたが、こんなふうにも文字も消え、刻まれている五大の形も見えませんでした。ただの朽木としか見えませんが。

僧 たとえ、深山の朽木であっても、花が咲いた木はすぐにそれとわかるもの。まして、これは仏のお姿を刻んだ木。どうして、それとわからないことがあろうか。  
老女 わたくしは賤しい老残の身ですが、風情を解する心はまだまだ残っているのです、こうして腰掛けていることも、多少は仏への手向けになると思うのです。ところでうかがいますが、卒都婆を仏体とするその理由は何ですか。

僧 それは、真如も同じなのか。  
老女 そうです。真如もまた、これという実体があるものではないのです。

僧 仏と衆生の区別などはないのです。  
老女 もともと、諸仏によるありがたい誓願は、愚かな凡夫を救おうとするための手段なのです。だから、たとえ悪事を行った者であっても成仏できるのです。

と、老女が詳しく説いたので、僧は、「まことに深く悟つた老女だ」と言つて、頭を地につけて、三度、老女に礼拝された。それで、老女は得意になって、戯れに、同じことを歌で詠んだのだつた。

老女 これを歌で表現するならば、「極楽の内です卒都婆に腰掛けたらとんでもないことですが、このように極楽の外の卒都婆なら少しもさしつかえはないはずですよ」となるでしょうか。それにしても、僧の仏法理解はあまりに形式にとらわれすぎています。

#### 4 老女、僧たちの応対

老女は小野小町であることを明かし、現在の老残の姿を恥じるうち、突然、何者かの靈に取り憑かれる。

僧 これは心ある乞食です。昔の名前を尋ねたいと思ひます。さあ、乞食よ、昔はどういう者だつたのか、その名を名乗ってください。  
老女 恥ずかしながら、わが名を名乗ることにしましたよ。  
わたくしは、出羽の郡司であつた小野良実の娘で、落魄した小野の小町です。

僧 従僧 これはおいたわしい。小町といえば、昔はたいへん高貴なお方で、花のような顔は輝やくばかりぞかし

4  
〔問答〕  
ワキ「これは心ある乞巧人にて候、古への名を尋ねばやと思ひ候、いかに乞巧人、古へはいかなる者ぞ、名をおん名のり候へ  
シテ「恥づかしながら名を名のり候ふべし  
〔名ノリグリ〕  
シテ「これは出羽の郡司小野の良実が女、小野の小町がなれる果てにてさむらふなり  
〔サシ〕  
ワキ、ワキツレ「いたはしやな小町は、さも古へは優女にて、花の貌輝き、桂の黛青うして、白粉を絶えさず、羅稜の衣多うして、桂殿の間に余りしぞかし

シテ「歌を詠み詩を作り  
地「酔ひを勧むる鴈は、漢月袖に静かなり  
〔下ゲ歌〕  
地「まこと優なる有様の、いつそのほどに引きかへて  
〔上ゲ歌〕  
地「頭には、霜蓬を戴き、嬋娟たりし両鬢も、膚に悴けて墨乱れ、宛轉たりし雙蛾も、遠山の色を失ふ  
〔下ゲ歌〕  
地「百歳に、一歳足らぬ九十九髪、かかる思ひは有明の、影恥づかしき我が身かな  
〔ロング〕  
地「頸にかけたる袋には、いかなる物を入れたるぞ  
シテ「今日も命は知らねども、明日の飢ゑを助けんと、粟豆の乾飯を、袋に入れて持ちたるよ  
地「後ろに負へる袋には  
シテ「垢膩の垢づける衣あり  
シテ「破れ笠  
地「面ばかりも隠さねば  
シテ「まして霜雪雨露  
地「涙をだにも抑ふべき、袂も袖もあらばこそ、今は路頭にさそらひ、往き來の人に物を乞ふ、乞ひ得ぬ時は悪心、また狂乱の心つきて、声変はりけしからず

〔歌〕  
地「行きては帰り、帰りは行き、一夜二夜三夜四夜、七夜八夜九夜、豊の明の節会にも、逢はでぞ通ふ鶴の、時をも変へず暁の、榻のはしがき、百夜までと通ひ往て、九十九夜になりたり  
シテ「あら苦し目まひや  
地「胸苦しやと悲しみて、一夜を待たで死したりし、深草の少将の、その怨念が憑き添ひて、かやうに物には、狂はするぞや

〔キリ〕  
地「これにつけても後の世を、願ふぞまことなりける、砂を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつつ、悟りの道に入らうよ、悟りの道に入らうよ

かり、眉は月のように清らかで、いつも白粉を絶やすことなく、また、所持している薄衣は美しい家には入りきれないほど多くあったか。

老女 また、歌も詠み、詩も作り、七夕の宴席で人に盃を勧める袖には、天の川の月が映るような風情で、ほんとうに優雅なありさまだったのですが、いつのまにか、昔とはうって変わったありさまとなつてしまいました。

その結果、頭髮は霜を置いた蓬のように白くなり、蟬の羽根のように艶やかだった左右の鬢もちぢれてしまい、三日月のように美しかった二つの眉も、遠山のような美しさが失せてしまいました。

百年に一年足らない九十九歳という年齢となつて、髪も海草のようになり、苦しい思いばかりをしていきます。このような姿が月光に照らされたりするのは、恥ずかしいかぎりです。

僧 首に掛けている袋には、何が入っているのですか。

老女 今日の命さえわからないのですが、明日の食へる物に困らないようにと、乾燥させた粟や豆を袋に入れてはいるのです。

僧 背負っている袋の物は何ですか。

老女 垢やあぶらで汚れた衣です。

僧 臂に掛けている籠には何が。

老女 白と黒の慈姑です。

僧 簀は破れていますか。

老女 笠も破れています。

僧 顔すら隠せません。

老女 まして、雨露霜雪も凌げず、涙を抑えることさえできません。いまはこうして路頭にさすらつて、往き來の人に物乞いをしてるしまつ。物乞いがうまくゆかないときには、腹を立てて悪態をついたりしています。

と、そう言ったかと思うと、老女は狂乱状態となつて、その声も異様な声に変わったのだった。

衣の袖をかざして、人目を忍んで、月の夜も闇の夜も、雨の夜も風の夜も、こうして小町のもとへ通つたのです。そうして、季節も木の葉が散る時雨どきから雪深い季節へと移つてゆきました。

やがて、雪解けの雨垂れが軒から落ちる季節になつても、せつせと精を出して、行きつ戻りつし、一夜、二夜、三夜、四夜、七夜、八夜、九夜、十夜と数えながら通つたのですが、小町には会わず、わたくしは鶏のように、いつも時間どおり、明け方に榻の端に通つた回数を書き記したのでした。しかし、なんとか百夜までとは思つて通つてゆき、とうとう九十九夜になったのです。ところが、九十九夜まで通つたところで、「ああ、胸が苦しい。目が回る。胸が苦しい」と叫んで、あと一夜を残して、少将は死んでしまったのです。その深草少将の恨みが憑き崇つて、このように狂乱させているのです。

〔終曲〕  
小町は憑依から覚め、後世を思つて、仏道に入つて心を心に誓い、合掌して留め。

老女 こんな目にあうにつけ、後世を願うのが正しい道なのだと思います。童が砂を集めて仏塔を作つて遊ぶように、み仏の黄金の肌を磨き、み仏に花を手向けて供養を重ね、仏道に入ろうと思います。

〔問答〕  
シテ「なう物賜べなう」「お憎なう  
ワキ「何事ぞ  
シテ「小町が許へ通はうよなう  
ワキ「おことこそ小町よ、何として現なき事をば宣ふぞ

シテ「いや小町といふ人は、あまりに色が深くて、あなたの玉章ごなたの文、かき昏れて降る五月雨の、虚言なりとも、一度の返事も無うて、今百歳になるが報うて、あら人恋しや、あら人恋しや  
ワキ「人恋しいとは、さてただ今はいかやうなる者の憑き添ひたるぞ

シテ「小町に心を懸けし人は多き中にも、殊に思ひ深草の、四位の少将の  
〔歌〕  
地「恨みの数の廻り来て、車の榻に通はん、日は何時ぞ夕暮れ、月こそ友よ通ひ路の、関守はありとも、留るまじや出で立たん

〔物着〕

〔歌〕  
シテ「淨衣の袴かいとつて  
地「淨衣の袴かいとつて、立烏帽子を風折り、狩衣の袖をうち被いて、人目忍ぶの通ひ路の、月にも行く闇にも行く、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪深し  
〔口〕  
シテ「軒の玉水、とくとくと

〔5〕老女の憑依  
四位少将の霊に取り憑かれた老女は、着衣を替えて、かつての「百夜通い」を再現しようとする。

老女 もうし、何かお恵みください。もうし、お僧殿。  
僧 いったい、どうしたというのか。  
老女 小町のもとへ通うことにしよう。

僧 そなたが小町ではないか。どうして正気とは思えぬことを言うのか。  
老女 いやいや、小町という人は、たいへんな美貌の持ち主で、多くの貴公子からたくさんのお文が届けられたのですが、たとえ本心ではないものでも、誰にも返事をしませんでした。百歳になつたいま、その報いがきて、いまは人恋しくなりません。ああ、人恋しいこと。

僧 人恋しいなどと言うのは、いったい誰の霊が取り憑いたのか。  
老女 小町に思いを寄せた人はたくさんいたが、その思いがとりわけ深かったのが四位少将でした。その四位少将の積もる恨みが、いまよみがえつてきました。ああ、小町の車の榻に通うことにしよう。

時刻はいつごろかと思えば、はや夕暮れ時です。では、月を友として通うことにしよう。途中で関守に止められても、あきらめることはすまい。ああ、出掛けよう。

〔小町は後見座で烏帽子・長絹を着け、憑依した少将の姿となる〕

〔6〕老女の立働き

少将の霊が憑いた小町は、少将が小町のもとへ通つたときのようすや、約束の百夜を目前にして少将が頓死したことを仕方を交えて再現し、この狂乱はその少将の恨みのせいだと言ふ。

老女 さあ、淨衣の袴の裾をとつて、出掛けよう。淨衣の袴の裾をとつて、立烏帽子を風折り、狩衣の袖をうち被いて、人目忍ぶの通ひ路の、月にも行く闇にも行く、雨の夜も風の夜も、木の葉の時雨雪深し  
〔口〕  
シテ「軒の玉水、とくとくと

### 『卒都婆小町 一度之次第』の詞章・現代語訳についてのメモ

- ◆【習ノ次第】は人物の登場案(出囃子)です。
- ◆ 詞章冒頭の〈次第(サシ)下ゲ歌(上ゲ歌)問答〉などは、当該箇所(曲節)の名称です。ワキ、ワキツレは下掛り宝生流のもの。
- ◆ また、〔口〕は名称をつけるほどではない節を仮にこの形で表したものです。
- ◆ 詞章で「が」が付けられた箇所は韻文のフシ(節)、「が」が付けられた箇所は散文のコトバ(詞)です。
- ◆ 掛詞と認められる箇所にはもうひとつの意味を左肩に漢字で小さく記しています。
- ◆ 詞章に「地」とされている部分は、戯曲上は大別して、
  - ① シテのセリフ
  - ② ワキのセリフ
  - ③ 叙事文(小説で言えば「地の文」)
- ◆ の三種があるので、現代語訳にさいしては、そのいずれか判断して訳しています。
- ◆ また、③ 叙事文の箇所(現代語訳は二字下げにしてあります)。

今回は、「一度之次第」という小書(演出)で上演するため、通常の『卒都婆小町』では上演される、冒頭のワキ・ワキツレの文句が多くカットされています。以下に、通常の『卒都婆小町』での、冒頭の詞章を掲載します。

〔次第〕  
ワキ、ワキツレ「山は浅きに隠れ家の、山は浅きに隠れ家の、深きや心なるらん  
〔名ノリ〕  
ワキ「これは高野住山の沙門にて候、霊仏霊社参詣のため、ただ今都へ上り候  
〔サシ〕  
ワキ「それ前仏は既に去り、後仏は未だ世に出でず  
ワキ、ワキツレ「夢の中間に生まれ来て、何を現と思ふべき、たまたま受け難き人身を受け、遇ひ難き如来の教法に遇ふ事、これぞ悟りの種となる  
〔下ゲ歌〕  
ワキ、ワキツレ「思ふ心も一重なる、墨の衣に身をなして  
〔上ゲ歌〕  
ワキ、ワキツレ「生まれぬ前の身を知れば、生まれぬ前の身を知れば、憐れむべき親もなし、親のなれば我が為に、心を留むる子もなし、千里を行くも遠からず、野に臥し山に泊まるこそ、げに捨つる身の習ひなれ、げに捨つる身の習ひなれ。  
〔着キセリフ〕  
ワキ「急ぎ候ほどに、これははや津の国阿倍野の松原とかや申し候、この所に暫く休らはうするにて候

「いさえ押さえれば面白〜！」

## 『卒都婆小町』見どころ・聞きどころ

二〇二三年度の「春秋座―能と狂言」の能の演目は『卒都婆小町』。『卒都婆小町』は文学にも取り上げられ、また演劇やダンス作品にされるなど多くの人々を魅了してきた作品です。ですが初めて観る人にはちよつと難解な部分もあるかも？ 特に見どころとされる「卒都婆問答」は難しい印象があります。そこで舞台芸術研究センター前所長であり大阪大学名誉教授の天野文雄先生に、「卒都婆問答」ではいったい何を話しているのか、その内容を教えてもらいました。

聞き手：佐藤和佳子（舞台芸術研究センター）

### ■善も悪も変わらない

― 『卒都婆小町』の最大の見どころの一つに、前半の「卒都婆問答」と呼ばれる場面があり、ここは物語の中でもかなりの部分をさいていますね。

**天野** そうですね。ここは老女（小野小町）と僧がやりあう場面ですが、この場面で観阿弥が何を言わんとしているかが重要なのです。

― 二人の会話を見ると金剛薩埵や観音、文殊など仏様が出てくるので、宗教の話をしているのは分かります。

まり一見、仏法に反する行為だったとしても、それが成仏のきっかけになると言っているんですね。

**從僧** 提婆が悪も

**小町** 観音の慈悲

**僧** 槃特の愚痴も

**小町** 文殊の知恵

**從僧** 悪と云ふも

**小町** 善なり

**僧** 煩惱と云ふも

**小町** 菩提なり

そうすると從僧が、「釈迦の弟子の提婆（＝提婆達多）のような悪人でもか」と問います。それに対し老女が「提婆も観音様と同じように往生できる」と答えれば、僧は「槃特（＝周利槃特）のような愚かな人でもか」と問う。それに対し老女が「慈悲深い観音様と同じ様に」と答える。そして「愚かなことも文殊のように知恵を持つていることも変わらない」「では煩惱とは？」「煩惱も菩提も変わらない」と続いていくわけです。僧はいたって常識的で形式的な仏教の論理で攻めてくるわけですが、老女がそれに対してことごとく論破するんですね。そして言っていることは全て同じ。悪とはすなわち善だということなのです。

### ■宗教対決の勝敗はいかに

**縦僧** 菩提もと

**小町** 植木にあらず

**僧** 明鏡また

**小町** 台になし

**天野** ここで有名な禅語（偈・ゲ）が出てきます。これは元々、「身は是れ菩提樹、心は明鏡の台のごと

**天野** そうですね。注目すべきは、「高野山での修行を終えてきた」と言う僧が、宗教者でもなんでもない普通の老女とやりあう点です。ごく常識的な仏教の考え方を持つ僧が山から下りてきたら、卒都婆（ふつうは卒塔婆と書く）に腰かけている老女がいた。そこから話が始まるわけです。

― 私たちが思い浮かべる卒都婆とは、お墓の後ろに立ててある縦長の木片ですが、これに座ることができるんですか？

**天野** この卒都婆は、恐らくこれは角材みたいな形だったのだと思います。今もそのような形態のものを時々、見かけますよ。

― それなら腰掛けられそうですね。

**天野** 卒都婆とは元々、サンスクリット語で「ストゥーバ」と言って、お釈迦さまの遺骨を納めた塔なのですね。ですから僧にしたら仏の象徴のようなもの。そう考えると卒都婆に腰掛けている老女に「けしからん！」と言いたくなる気持ちもわかりますよね。ですが、「けしからん」と言ってくる僧に対して、この老女が堂々とやり合うんですよ。

これは私の考えですが、僧は高野山で修業をしたので、「真言宗的」な発想で話してきますが、小町は無一物何れの処にか塵埃有らん」という禅語の一節です。

「菩提はもとより樹無し」というのは、菩提（悟り）とは樹（形）では無い。明鏡をのせる台ではない。みんな菩提や明鏡を大事にするけれど、本来、実体としての物もないのだから、そんなことには一切、こだわる必要が無いという意味です。

老女と僧が、この菩提と明鏡でやりあった後、続く地謡で（ここも小町のコトバです）、「本来無一物何れの処にか塵埃有らん」の部分に触れ、人間や万物は何も持っていないところから生まれたのだから、どこに塵や垢が付くのだと言っているのです。これは地謡ですが老女の言葉ですね。

― すごい話をしていましたね。

**天野** そして地謡が続きます。ここもやっぱり小町のコトバです。

そう考えれば、仏も我々も隔てはない。元より諸仏のありがたい請願は、愚かなものを救う方便で作られたのだから、逆縁だろうがなんだろうが成仏できないことがあるのか。だから私がこうやって卒都婆にかける逆縁をしても浮かべられるんです。ここまでが小町のセリフなんですね。そして僧は降参して頭を三度、床に付けて礼拝したので、いよいよ得意になって小町は、「なお戯れの歌を詠む」と戯れに今言ったことと同じことを歌に詠むのです。

ただ、これも単なる創作でなく当時、流行っていた歌です。極楽の内と外が対になっていて、仮にこれが極楽の内であれば卒都婆に腰をかけるのは問題だけれど、極楽の外であれば文句はないはず。どこが

「禪的」な発想で返しているのです。一般的に真言宗は平安時代に日本に入ってきたと言われ、禅は『卒都婆小町』が作られた少し前、鎌倉時代に入ってきたと言われています。ですから、ここには旧仏教と新仏教の争いのようなものも含まれているのではないかなと思っっているんです。

その老女が主張するのは何なのか。簡単に言うると「善も悪も変わらないものだ」ということです。善悪は別々のものと思われがちですが、そうではなく、一つものだということです。仏教に「煩惱即菩提」という言葉があるのですが、これは「煩惱はそのまま悟りの縁である」という意味です。煩惱や悪は価値のない物ではない、菩提（悟りを求める心）や善だけが価値のあるものではないと老女は言っているんですね。

### ■堂々と僧をやり込める

― それを言うために、いくつもの例を重ねていくんですね。

**天野** そうです。問答の真ん中あたりで「順縁」と「逆縁」ということが出てきます。

**僧** それは順縁に外れたり

**小町** 逆縁なりと浮かむべし

**天野** というところですね。「順縁」というのは、仏道に入るための善行という意味です。ですから卒都婆は大事にしなければいけない。「だからあなたの行為は順縁から外れています」と僧は言うわけです。けれど小町は「逆縁（仏の教えを素直に信じないこと）だって往生できますよ」と言い返しているのです。つ

悪いのだという意味ですね。ここでは小町がソトワと発音していることに注意してください。当時の発音はソトワだったので、みごとに掛詞（一つの言葉に二つの意味をもたせる技法）になっています。

― 当時、新しかった禅的な考え、流行った歌など、当時の空気が分からないと面白味が半減しますね。そしてこの時代には、やはり宗教というものが教養、文化としても大事だったわけですね。

**天野** そうですね。僧をやりこめるという話の背後には、旧仏教と新仏教の違いがあり、この場合は完全に禅の勝ちですね。

特に禅は武士階級に広まりましたし、能のパトロンでもあった室町将軍は始めから禅僧と親しかったので禅の知識がすごくあるわけです。作者の意図として、そういった時代に合わせたということもあるのでしょうね。能は、芸能の部分ばかりが前面に出がちですが、当時の「宗教こそが正しい道なのだ」という主張が、この『卒都婆小町』には入れ込まれているわけです。

― なるほど。老女と僧が何を言おうとしているのかが分かり、舞台がより面白く拜見できそうですね！

本インタビュー記事は京都芸術劇場WEBサイトより転載しています。



# 主な出演者プロフィール

のむら まんさく

## 野村 万作

和泉流狂言方。一九三二年生まれ。重要無形文化財保持者（人間国宝）。文化功労者。日本芸術院会員。祖父故六世野村萬斎及び父故六世野村万蔵に師事。早稲田大学文学部卒業。「万作の会」主宰。狂言の秘曲である『釣狐』の演技で芸術祭大賞を受賞した他、紀伊國屋演劇賞、日本芸術院賞、紫綬褒章、坪内逍遙大賞、朝日賞、旭日小綬賞、中日文化賞、ジャンソサイエティ賞等多くの受賞歴を持つ。国内外で狂言普及に貢献し、ハワイ大・ワシントン大では各員教授を務める。古典はもとより新しい試みにもしばしば取り組み、代表作に『月に憑かれたピエロ』『子午線の祀り』『秋江』『法螺持』等がある。近年では『檀山節考』の再演に取り組み、大きな成果を挙げている。二〇二三年度文化勲章受章。

## 野村 萬斎

のむら まんさい

和泉流狂言方。一九六六年生まれ。祖父故六世野村万蔵及び父野村万作に師事。重要無形文化財総合指定者。国内外の狂言・能公演はもとより、現代劇や映画の主演、古典の技法を駆使した作品の演出など幅広く活躍。芸術祭新人賞・優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞、千田是也賞、読売演劇大賞最優秀作品賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞等を受賞。石川県立音楽堂邦楽監督。公益社団法人全国公立文化施設協会会長。東京藝術大学客員教授。

◇◇◇◇◇

## 九世 観世 鍊之丞

かんぜ つつのじょう

シテ方観世流。一九五六年生まれ。本名、暁夫（あけお）。八世観世鍊之丞（人間国宝）の長男。伯父観世寿夫、および父に師事する。四才で初舞台。六四年「岩船」で初シテ。力強さと繊細さを兼ね備えた謡と演技には定評がある。東京および京都・大阪でも活躍するほか、海外公演にも多く参加。日本芸術院賞、紫綬褒章受賞。重要無形文化財総合指定保持者。公益社団法人鍊仙会理事長。公益社団法人能楽協会理事長。

## 宝生 常三

ほうしょう つねぞう

宝生流ワキ方。父・森茂好および伯父・宝生弥一に師事。一九六三年「岩船」のワキで初舞台。一九七八年「道成寺」翌年「張良」を披く。芸術選奨文部大臣新人賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞。下掛宝生会に所属。日本能楽会会員。二〇二三年、宝生新の弟の名（常三）を名のり、森常好より改名。

## 十世 片山 九郎右衛門

かたやま くろうえもん

シテ方観世流。一九六四年九世片山九郎右衛門幽雪、人間国宝の長男として生まれる。祖母は京舞井上流四世家元井上八千代、姉は五世家元井上八千代。幼少より父に師事し、長じて故八世観世鍊之丞に教えを受ける。父とともに片山定期能楽会を主宰。全国各地で多数の公演に出演するほか、ヨーロッパ、アメリカなど海外公演にも積極的に参加している。各地での新能、ホール能など能楽堂以外の公演も制作、プロデュースする。また、学校へ出向いての能楽教室の開催、能の絵本の制作、映像を駆使した舞台の制作、能舞台のCG化など、若年層のための能楽の普及活動も手掛ける。京都府文化賞奨励賞、京都市芸術新人賞、日本伝統文化振興財団賞、文化庁芸術祭新人賞、京都府文化功労賞、芸術選奨新人賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞、重要無形文化財総合指定保持者。

〔トーク出演〕

## きたまり

振付家。二〇〇三年よりダンスカンパニーKIKIKIKI主宰。以後、国内外で自身の振付作品を発表。近年は大学時代の恩師である劇作家・太田省吾の戯曲『老花夜想ノクタン』『棲家』を原作に戯曲言語を舞踊化するシリーズをはじめするなど、ダンスと他分野の表現を扱いジャンルを越境した多岐にわたる創作を展開。二〇二三年度よりセン文化財団ゼノン・フェローII。十一月大江能楽堂（京都）にて、新作ダンス公演『小町風伝』（原作・太田省吾、振付・演出・出演・きたまり）を上演予定。

【詞章整理・現代語訳・解説】

あまの

## 天野 文雄

一九四六年、東京都生まれ。大阪大学名誉教授。京都芸術大学舞台芸術研究センター前所長。著書に、『翁猿楽研究』『観世寿夫記念法政大学能楽賞』、『能に憑かれた権力者―秀吉能楽愛好記』、『現代能楽講義』『世阿弥がいた場所―能大成期の能と能役者をめぐる環境』（日本演劇学会河竹賞）、『能死逍遙（上中下）』『能楽名作選（上下）』『能楽手帖』、共編著に『能を読む』（全四巻）などがある。

たけいち まなぶ

## 竹市 学

笛方藤田流。一九七二年生まれ。一九八三年藤田流宗家入門。一九八四年初舞台。一九九六年国立能楽堂三役養成事業、三期生卒業。『猩々乱』『獅子』『翁』『道成寺』『清経 音取』『卒都婆小町』を披く。ニューヨーク・11追悼公演。ギリシャ・アテネフェスティバルほか海外公演に多数参加。芸術創造賞、名古屋市芸術奨励賞受賞。

## 大倉 源次郎

おおくら げんじろう

小鼓方大倉流十六世宗家。一九五七年生まれ。重要無形文化財保持者（人間国宝）認定。十五世宗家大倉長十郎の次男。父に師事。一九六五年、独鼓『鮎の段』で初舞台。一九八五年、大倉流宗家を継承。大阪文化祭奨励賞、大阪市咲くやこの花賞、観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。公益社団法人能楽協会副理事長。

## 亀井 広忠

かめい ひろただ

大鼓方葛野流十五世家元。一九七四年生まれ。亀井忠雄（人間国宝・葛野流十四世家元）の長男。母は歌舞伎囃子方田中流十二世家元田中佐太郎。父及び八世観世鍊之丞（人間国宝）に師事。六歳の時『羽衣』で初舞台。一九八二年『合甫』で初能。ピクター伝統文化振興財団賞奨励賞、日本伝統文化奨励賞、二〇二三年度伝統文化ボーラ賞優秀賞、二〇二三年度観世寿夫記念法政大学能楽賞受賞。国立能楽堂および国立劇場養成研修所講師。重要無形文化財総合指定保持者。学習院大学非常勤講師。

照明デザイン 藤原康弘
舞台監督 小坂部恵次
制作・トーク進行 川原美保

京都芸術大学 舞台芸術研究センター
技術監督 大田和司
制作 芝田江梨、井川萌

舞台担当 大野淳一郎
音響担当 寺坂素直
照明担当 小山陽美

協力 鍊仙会、万作の会

宣伝美術 佐藤博一
パンフレット 井川萌

主催・制作 京都芸術大学 舞台芸術研究センター
〒606-8271 京都市左京区北白川瓜生山2-116
電話 075-791-9207 https://k-pac.org/

「春秋座―能と狂言」シリーズは、二〇〇九年度にフランス文学者・演出家の渡邊守章当センター所長（当時）の企画・監修により始まりました。今回で15回目を数えます。